

# 富岡先生

国木田独歩

青空文庫



何公こうしやく爵の旧領地とばかり、詳細くわしい事は言われぬ、侯伯子  
 男の新華族を沢山出ただけに、同じく維新の風雲に会しながら  
 も妙な機はずみから雲梯うんでいをすべり落ちて、遂つひには男爵どころか県知事  
 の椅子ひとつ一にも有ありつき得ず、空むなしく故郷くにに引込んで老朽ちんとする  
 人物も少くはない、こういう人物に限りて変かわりもの物である、頑が  
んこ固である、片意地である、尊大である、富岡先生もその一人たる  
 を失なわぬ。

富岡先生、と言えばその界隈かいわいで知らぬ者のないばかりでなく、

恐らく東京に住む侯伯子男の方々の中にも、「ウン彼奴か」と直ぐ御承知の、そして眉をひそめらるる者も随分あるらしい程の知名な老人である。

さて然らば先生は故郷で何を為していたかというに、親族が世話するといふのも拒んで、広い田の中の一軒屋の、五間ばかりあるを、何々塾と名け、近郷の青年七八名を集めて、漢学の教授をしていた、一人の末子を対手に一人の老僕に家事を任かして。

この一人の末子は梅子という未だ六七の頃から珍らしい容貌佳しで、年頃になれば非常の美人になるだろうと衆人から噂されていた娘であるが、果してその通りで、年の行く毎に益々美しく成る、十七の春も空しく過ぎて十八の夏の末、東京ならば

学校の新学期の初まるも遠くはないという時分のこと、法学士大  
おつていじろう津定二郎が帰省した。

富岡先生の何々塾から出て（無論小学校に通いながら漢学を学  
 び）遂に大学まで卒業した者がその頃三名ある、この三人とも梅  
 子嬢さんは乃公おれの者と自分で決定きめしていたらしいことは略世間ほぼでも嗅かぎ  
 つけていた事実で、これには誰も異議たれがなく、但し三人の中何人うちだれ  
 が遂に梅子嬢さんを連れて東京に帰り得うるかとは、他所よそながら指くわを啣くわ  
 て見物わかものしている青年も少くはなかつた。

法学士大津定二郎が帰省した。彼は三人の一人である。何峠か  
 ら以西いせい、何川辺あぎまでの、何町、何村、字何あぎの何という処しよしよ々々の家  
 の、種々の雑談に一つ新しい興味ある問題が加わった。愈々いよいよ大

津の息子はお梅さんを貰いに帰ったのだろう、甘く行けば後の高山の文さんと長谷川の息子が失望するだろう、何に田舎でこそお梅さんは美人じゃが東京に行けばあの位の女は沢山にありませんから後の二人だってお梅さんばかり狙うてもおらんよ、など厄鬼になりて討論する婦人連もあつた。

或日の夕暮、一人の若い品の佳い洋服の紳士が富岡先生の家の前えに停止まって、頻りと内の様子を窺つてはもじもじしていたが遂に門を入れて玄関先に突立つて、

「お頼みします」という声さえ少し顫えていたらしい。

「誰か来たぞ！」と怒鳴つたのは確に先生の声である。

襖が静に開いて現われたのが梅子である。紳士の顔も梅子の顔

も一時いちじにさつと紅こうをさした。梅子はわずかに会釈して内に入った。「何だ、大津の定さんが来た？、ずんずんお上りんさいと言え！」先生の太い声がありありと聞えた。

大津は梅子の案内で久しぶりに富岡先生の居間、即ち彼がその昔漢学かみの素読そどくを授つた室へやに通つた。無論大学に居た時分、一夏帰省した時も訪とうた事はある。

老漢学者と新法学士との談話はなしの様子は大概次の如くであつた。

「ヤア大津、帰省かえつたか」

「ともかく法学士に成りました」

「それが何だ、エ？」

「内務省に出る事に決定きまりました、江藤さんのお世話で」

「フンそうか、それで目出度めでたいというのか。然し江藤さんは全体誰の事じゃ」

「江藤侯のことで……直ちよくぶん文ぶんさんのことで」

「ウーンさんすけ三輔さんすけのことか、そうか、三輔なら三輔と早く言えば可ええに。時に三輔は達者かナ」

「相変らず元気で御座います」

「フンそうか、それは結構じゃ、狂之助は？」

「御丈夫のようで御座います」

「そうか、今度逢あつたら乃公わしが宜よく言つたと言つとくれ！」

「承知致しました」

「ちつと手紙でもよこせと言え。エ、侯爵こうしゃくづら面づらして古い士族を

忘れんなど言え。全体彼奴等あいつに頭を下げぺこぺこと頼み廻るなんちゆうことは富岡の塾なよこの名汚なよごしだぞ。乃公わしに言えば乃公から彼奴等に一本手紙をつけてやるのに。彼奴等は乃公の言うことなら聴きかん理由わけにいかん」

先ずこんな調子。それで富岡先生は平気な顔して御座る。大津は間もなく辞して玄関に出ると、梅子が送つて来た。大津は梅子の顔を横目で見て、「またその内」とばかり、すたこらと門を出て吻ほっと息を吐ついた。

「だめだ！　まだあの高慢狂きちがい気が治なおらない。梅子さんこそ可い面の皮つらだ、フン人を馬鹿ばかにしておる」と薄暗い田甫道たんぼみちを辿たどりながら眩つぶやいたが胸の中は余り穩おだやかでなかつた。

五六日経つと大津定二郎は黒田の娘と結婚の約が成つたという噂が立つた。これを聞いた者の多くは首を傾けて意外という顔かおつ色をした。然し事実全くそうで、黒田という地主の娘玉子嬢、

容きりよう貌は梅子と比べると余程落ちるが、県の女学校を卒業してちようど帰郷かえつたばかりのところを、友人某なにがしの奔走で遂に大津と結婚することに決定きまつたのである。妙なものでこう決定きまると、サアこれからは長谷川と高山の競争だ、お梅さんは何方どっちの物になるだろうと、大声で喋舌しゃべる馬面うまがおの若い連中も出て来た。

ところで大津法学士は何でも至急に結婚して帰京の途中を新婚旅行といふことにしたいと申出たので大津家は無論黒田家の騒動さわぎは尋常ひととおりでない。この両家とも田舎では上流社会に位いするの

で、祝儀しゅうぎの礼が引きもきらない。村落に取つては都会おに於ける岩崎三井の祝事いわいごとどころではない、大変な騒ぎである。両家は必死になつて婚儀の準備に忙殺されている。

その愈々いよいよ婚礼の晩という日の午後三時頃でもあろうか。村の小川、海に流れ出る最近まぢかの川柳しげ繁れる小陰に釣たるを垂る二人のがある。その一人は富岡先生、その一人は村の校長細川繁、これも富岡先生の塾に通うたことのある、二十七歳の成年男子である。

二人は間を二三間隔ひかげてて糸を垂れている、夏の末、秋の初の西に傾いた鮮やかな日景あざは遠村近郊小丘樹林くまを隈なく照らしている、二人の背はこの夕陽ゆうひをあびてその傾いた麦藁帽子かたぶとその白い湯衣かたじとを真まともに照りつけられている。

二人とも余り多く話さないで何となく物思に沈んでいたようであつたが、突然校長の細川は富岡老人の方を振向いて

「先生は今夜大津の婚礼に招かれましたか」

「ウン招よばれたが乃公おれは行かん！」と例の太い声で先生は答えた。実は招かれていないのである。大津は何と思つたかその旧師を招かなかつた。

「貴様おまえはどうじゃ？」

「大津の方からこの頃は私を相手にせんようですから別に招よびもしません」

「招よんだつて行くな。あんな軽薄やっな奴のところに誰が行く馬鹿があるか。あんな奴にやア黒田の娘でも惜い位だ！ あれから見ると

同じ大学を出ても高山や長谷川は人間が一等上だのう、その中<sup>うち</sup>でも高山は余程見込がある男だぞ」

細川繁は黙って何にも言わなかつた、ただ水面を凝視<sup>みつ</sup>めている。富岡老人も黙つて了<sup>しま</sup>つた。

暫<sup>しばら</sup>くすると川<sup>かわ</sup>向<sup>むこう</sup>の堤の上を二三人話しながら通るものがある、川柳の蔭<sup>かげ</sup>で姿は能<sup>よ</sup>く見えぬが、帽子と洋傘<sup>こうもり</sup>とが折り折り木<sup>こ</sup>間<sup>のま</sup>から隠見<sup>かくみ</sup>する。そして声音<sup>こわね</sup>で明らかに一人は大津定二郎一人は友人某<sup>ぼう</sup>、一人は黒田の番頭ということが解る。富岡老人も細川繁も思はず聞耳を立てた。三人は大声で笑い興<sup>きよう</sup>じながらちようど二人の対岸まで来た二人の此処<sup>ここ</sup>に蹲居<sup>しゃが</sup>んでいることは無論気がつかない。

「だつて貴様あなたは富岡のお梅嬢さんに大變熱心だつたと言いますぜ」これは黒田の番頭の声である。

「嘘うそサ、大嘘サ、お梅さんは善いにしてもあの頑固爺がんこおやじの婿むこになるのは全く御免だからなア！ ハツハツ……お梅さんこそ可憐かわいそうなものだ、あの高慢狂氣さちがいのお蔭で世に出ることが出来ない！」これは明らかに大津法学士の声である。

三人は一度に「ハツハツハツ……」と笑つた。富岡老人釣竿つりざおを投出なげだしてぬツくと起上たちあがった。屹度きつと三人の方を白眼にらんで「大馬鹿者！」と大声に一喝いっかつした。この物凄ものすごい声が川面かわづらに鳴り響いた。

対岸むこうの三人は喫驚びつくりしたらしく、それと又気がついたかして忽たちま

ち声を潜め大急ぎで通り過ぎて了つた。

富岡老人はそのまま三人の者の足音の聞こえなくなるまで対岸を白眼んでいたが、次第に眼を遠くの禿山に転じた、姫小松の生えた丘は静に日光を浴びている、その鮮やかな光の中にも自然の風物は何処ともなく秋の寂寥を帯びて人の哀情をそそるような気味がある。背の高い骨格の逞ましい老人は凝然と眺めて、折り折り眼をしばだたいていたが、何時しか先きの氣勢にも似ずさも力なさそうに細川繁を振向いて

「オイ貴公この道具を宅まで運こんでおくれ、乃公は帰るから」  
 言い捨てて去つて了つた。校長の細川は取残されてみると面白くないが、それでも糸を垂れていた、実は頻りと考え込んでい

たのである。暫時しばらくするとこれも力なげに糸を巻き籠びくを水から上げて先生の道具と一緒に肩にかけ、程遠ほどからぬ富岡の宅うちまで行った。庭先で

「老先生どうかしたのか喃のう」と老僕倉蔵が声を潜めて問うた。

「イヤどうもなさらん」

「でも様子が少し違うから私わし又どうかかなされたかと思つて」

「先生今何をしておいでる？」

「寝ていなさるが枕まくらもと頭に嬢様呼んで何か細い声こまかで話をしておいでるようで……」

「そうか」

「まア上つて晩まで遊んでおいでなされませえの」

「晩にでも来る！」

細川は自分の竿を担かついで籠びくをぶらぶら下げ、浮かぬ顔をして、我家へと帰った。この時が四時過ぎでもあろう。家では老母が糸を紡ひいていた。

その夜の八時頃、ちようど富岡老人の平時いっも晚酌が済む時分に細川校長は先生を訪とうた。田甫道たんぽみちをちらちらする提燈ちようちんの数が多いのは大津法学士の婚礼があるからで、校長もその席に招かれた一人二人に途みちで逢あった。逢う度毎たびごとに皆みんなな知る人であるから二言三言の挨拶あいさつはしたが、可い心持はしなかった。

富岡の門まで行つてみると門は閉しまつて、内は寂然ひっそりとしていた。校長は不審に思ったが門を叩たたく程の用事もないから、其処そこらを、

物思に沈みながらぶらぶらしていると間もなく老僕倉蔵が田甫道を大急ぎで遣て来た。

「オイ倉蔵、先生は最早お寝みになったのかね？」

「オヤ！ 細川先生、老先生は今東京へお出発になりました！」  
と呼吸をはずまして老僕は細川の前へ突立った。

「東京へ」細川は声も喉に塞つたらしい。

「ハア東京へ！」

「マアどうしたのだろう！ お梅さんは？」

「御一緒に」

「マアどうしたのだろう！」校長は喫驚すると共に、何とも言い難き苦悩が胸を圧して来た。心も空に、気が気ではない。倉蔵

は門を開けながら

「マアお入りなされの」

校長は後について門を入り縁先に腰をかけたが、それも殆ど夢中であつたらしい。

「マア先生は何にも知らないのかね？」

「乃公わしが何を知るものか、今日釣に行つていたが老先生は何にも言わんからの」

「そうかの？」と倉蔵は不審な顔かおつき色をして煙草を吸い初めた。

「貴公理由おまえわけを知らんかね？」

「私唯わしただ倉蔵これを急いで村長の処ところへ持て行けと命いいつか令つりましたからその手紙を村長さん処ところへ持て行つて帰宅かえつてみると最早仕度もうしたくが

出来ていて、私わし直ぐ停車場まで送つて今帰つた処とこじゃがの、何知るもんかヨ」

「フーン」と校長考えていたが「何日頃いつ帰国かえると言われた？」

「老先生は十日ばかりしたら帰る、それも能くは解らんちゆうて……」

「そうか……」と校長は嘆息ためいきをしていたが、

「また来る」と細川は突然富岡を出て、その足で直ぐ村長を訪うた。村長は四十何歳いくつという分別盛りの男で村には非常な信用があり財産もあり、校長は何時いつもこの人を相談相手にしているのである。

「貴公あんた富岡先生が東京へ行った事を知っているか」と校長細川は

坐に着くや着かぬに問いかけた。

「知つているとも、先刻さつき倉蔵が先生の手紙を持って来たが、不在中家の事を托たのむと書いてあつた」と村長は夜具から頭ばかり出して話している。大津の婚礼に招ねかれたが風邪かぜをひいて出る事が出来ず、寝ていたのである。

「どういう理由わけで急に上京したのだろうか？」

「そんな理由わけは手紙に書いてなかつたが、大概想像が着くじやアないか」と村長は微笑を帯びて細川の顔をじろじろ見ながら言つた。彼は細川が梅子に人知れず思を焦がしていることを観破みぬいていたのである。

「私わしには解げせんア」と校長は嘆息ためいきを吐ついた。

「解せるじやアないか、大津が黒田のお玉さんと結婚しただろう、富岡先生少し当あてが外はずれたのサ、其処そこで宜よろしい此処こつちにもその積つもりがあるとお梅嬢さんを連れて東京へ行つて江藤侯や井下伯いのしたを押廻わしてオイ井下、娘を頼む位なことだろうヨ」

「そうかしらん？」

「そうとも！ それに先生は平常ふだんから高山々と讚ほめちぎつていたから多分井下伯に言つてお梅嬢さんを高山に押付ける積りだろう、可いいサ高山もお梅嬢さんなら兼ねらて狙ねらつていたのだから」

「そうかしらん？」と細川の声は慄ふるえている。

「そうとも！ それで大津の鼻をあかしてやろうと言うんだらう、可いいサ、先生も最早もうあれで余程よほど老衰よわつて御坐るから早くお梅嬢さんのこ

とを決定きめたら肩が安まって安心して死ぬるだろうから」

村長は理の当然を平気で語った。一つには細川に早く思いあきらめさしたい積りで。

「全くそうだ、先生も如あ彼見えても長くはあるまい！」と力なさそうに言つて校長は間もなく村長の宅うちを辞した。

憐あわれむべし細川繁！ 彼は全く失望して了つて。その失望の中には一いっの苦惱まじが雑まじつておる。彼は「我もし学士ならば」という一念を去ることが出来ない。幼時は小学校に於おいて大津も高山も長谷川も凌しのいでいた、富岡の塾でも一番出来が可よかつた、先生は常に自分を最も愛して御坐つた、然るに自分は家計の都合で中学校にも入いる事が出来ず、遂に官費で事が足りる師範学校に入つて卒業し

て小学教員となつた。天分に於ては決して彼等二三子には、劣らないが今では富岡先生すら何とかかんとか言つても矢張り自分よりか大津や高山を非常に優まさつた者のように思つてお梅嬢さんに熨斗のしを附けようとする！ 残念なことだと彼は恋の失望の外の言い難き恨を呑のまなければならぬこととなつた。

然し彼は資性篤実で又能く物に堪たえ得る人物であつたから、この苦悩の為に校長の職務つとめを怠おそるようなことは為しない。平常いづものやうに平氣の顔で五六人の教師の上に立ち数す百の児童を導びいていたが、暗愁の影は何処どことなく彼に伴うている。

富岡先生が突然上京してから一週間目のことであつた、先生は梅子を伴うて帰国<sup>かえ</sup>つて来た。校長細川は「今帰国<sup>かえ</sup>つたから今夜遊びに來い」との老先生の手紙を読んだ時には思わず四辺<sup>あたり</sup>を見廻わした。

自分勝手な空想を描きながら急いで往<sup>い</sup>つてみると、村長は最早座に居て酒が初まつていた。梅子は例の如く笑味<sup>えみ</sup>を含んで老父の酌をしている。

「ヤ細川！ 突<sup>だしぬけ</sup>如<sup>に</sup>に出発<sup>たつた</sup>ので驚いたろう、何急に東京を娘に見せたくなつてのう。十日ばかりも居る積じやつたが癩<sup>しやくさわ</sup>に触ることばかりだつたから三日居て出立<sup>たつ</sup>て了<sup>しま</sup>つた。今も話しているところ

じやが東京に居る故国くにの者は皆みんななだめだぞ、碌ろくな奴やつは一匹おも居おら  
んぞ！」

校長は全然まるで何のことだか、煙まに捲まかれて了まつて言うべき言葉が  
出ない、ただ富岡先生と村長の顔を見比べているばかりである。  
村長は怪しげな微笑を口元に浮べている。

「エえまア聞いてくれこうだ、乃公おれは娘おれを連れて井下ぶんきち聞吉おれの所  
へも江藤三輔の所へも行つた、エえ、故国くにからわざわざ乃公おれが久  
しぶりに娘まで連れて行つたのだから何とか物の言い方も有ろう  
じやア、それを何だ！ 侯爵こうしやく顔づらや伯爵おとぎ顔を遠慮なくさらけ出  
してその慢無礼ごうまんぶれいな風たら無かつた。乃公もグイと癪おに触ふつた  
から半時も居らんでずんずん宿へ歸もどつてやつた」と一杯ひといき一呼吸いきに

飲み干して校長に差し、

「それも彼奴等きやつの癖だからまア可ええわ、辛棒出来んのは高山や長谷川の奴らの様子だ、オイ細川、彼等きやつら全然まるでだめだぞ、大津と同じことだぞ、生意気で猪小才ちよこさいで高慢な顔をして、小官吏こやくにんになればあも増長されるものかと乃公も愛憎あいそが尽きて了しもうた。業が煮えて堪たまらんから乃公は直ぐ帰国かえろうと支度したくを為なしているとちよちようど高山がやって来て驚いた顔をしてこう言うのだ、折角連れて来たのだから娘だけは井下伯にでも托あずけたらどうだろう、井下伯もせめて娘だけでも世話をしてやらんと富岡が可憐かわいそうだと言いつて、大変乃公を気の毒がつていたとこう言うじやアないか、乃公は直いきなり然きやつ彼奴の頭をぼかり一本参まつてやった、何だ貴様まで乃公

を可憐そうだとか何とか思っているのか、そんな積りで娘を托けると言うのか、大馬鹿者！ と怒鳴つけてくれた」

「そして高山はどうしました」と校長は僅かに一語を発した。

「どうするものか真赤な顔をして逃げて去つて了うた、それから直ぐ東京を出発して何処へも寄らんでずんずん帰つて来た」

「それは無益ませんでしたね、折角おいでになつて」と校長はおずおずしながら言った。

先生の気焰は益々昂まつて、例の昔日譚が出て、今の侯伯子男を片端から罵倒し初めたが、村長は折を見て辞し去つた。

校長は先生が喋舌り疲ぶれ酔い倒れるまで辛棒して氣的の的となつていた。帰える時梅子は玄関まで送つて出たが校長何となく

こついていた。田甫道に出るや、彼はこの数日すじつの重荷が急に軽くなつたかのように、いそいそと路みちを歩いたが、我家に着くまで殆ほとんど路をどう来たのか解らなんだ。

## 三

その翌々日の事であつた、東京なる高山法学士から一通つうの書状てがみが村長の許もとに届いた。その文意は次の如くである。

富岡先生が折角上京されたと思うと突然帰国された、それに就つて自分は大に胸を痛めている、先生は相変らず偏執ひねくれておられる。我々は勿論もちろん先輩諸氏も決して先生を冷遇するのではないが先生

の方で勝手にそう決定きめて怒こつておられる、実に困こつた者で手の着けようがない。実は自分は梅子嬢さんを貰もらいたいと兼ねて思おもつていたのであるから、井下伯に頼たのんで梅子嬢さんだけ滞とめて置いて後あとから交渉かして貰もらう積しりでいた、然しかるに先生の突然の帰国でその計画も画が餅べいになつたが残念でならぬ。自分は容貌ようぼうの上のみで梅子嬢さんを思おもっているのではない、御存知の通り実に近頃の若い女子には稀まれに見るところの美しい性質しやうを以もつておられる、自分は随分東京で種々の令嬢方を見たが梅子嬢さんほどの癖のない、すらりとした、すなおなる女を見たことはない。女子の特質とも言うべき柔和な穏やかな何ど処こまでも優やさしいところを梅子嬢さんは十二分に有もつておられる。これには貴所あなたも御同感と信しんずる。もし梅子嬢さんの欠点を言えば剛という分

子が少ない事であろう、しかし完全無欠の人間を求めするのは求める方が愚である、女子としては梅子嬢さんの如き寧ろ完全に近いと言つて宜しい、或は剛あるいの分子の少ないところが却かえつて梅子嬢さんの品性に一段の奥ゆかしさを加えておるのかとも自分は思う。自分は決して浮きたる心でなく真面目まじめにこの少女を敬慕しておる、何卒か貴所なたも自分のため一臂いっぴの力を借して、老先生の方を甘く説いて貰いたい、あの老人程舵かじの取り難い人はないから貴所そこが其所を巧にやつてくれるなら此方こつちは又井下伯に頼んで十分の手順をする、何卒か宜しく御頼おたのみします。

但し富岡老人に話されるには余程よほどよき機会おりを見て貰いたい、無暗やみに急ぐと却て失敗する、この辺は貴所に於て決して遺漏ぬかりはない

と信ずるが、元來老先生といえども人並の性情を有つておるから了解わかすることは能く了解する人である。ただその資質に一点我慢強いとところのある上に、維新の際妙な行きがかりから脇道わきみちへそれて遂に成るべき功名をも成し得ず、同輩は侯伯たり後進は子男たり、自分は田舎いなかの老先生たるを見、かつ思う毎ごとにその性情は益々荒れて来て、それが慣ならい性せいとなり遂には煮ても焼ても食えぬ人物となつたのである、であるから老先生の心しん底ていには常に二個ふたりの人が相戦つておる、その一人は本来自然の富岡氏うじ、その一人はその経歴が造つた富岡先生。そして富岡先生は常に猛烈に常に富岡氏を圧服するに慣れている、その結果として富岡氏が希望し承認し或は飛びつきたい程に望んでいることでも、あの執拗ひねくれた焦熬いらいらし

ている富岡先生の御機嫌ごきげんに少しでも触さわらうものなら直ぐ一撃のもとに破壊されて了しまう。この辺のところは御存知でもあろうが能よく御注意あつて、十分機おり会を見定めて話して貰もらいたい。

という意味を長々と熱心に書いてある。村長は委細のみこを吞込んで、どうかおり何卒機おり会を見て甘うまくこの縁談を纏まとめたいものだと思つた。

三日ばかり経たつて夜分村長は富岡老人を訪とうた。機おり会を見に行つたのである。然るに座に校長細川あり、酒が出ていて老先生の気焰きえん頗こがる凄まじかつたので長居ながいを為せずかえに歸つて了つた。

その後五日経つて、村長は午後二時頃富岡老人を訪う積りでその門まで来た。そうすると先生の声で

「馬鹿者ばかもの！ 貴様きさままで大馬鹿になつたか？ 何が可笑おかしいのだ、

大馬鹿者！」

と例の大声で罵るののしりが手に取るように聞えた。村長は驚いて誰が叱咤られるのかとそのまま足を停めて聞耳を聳てしていると、内から老僕倉蔵がそつと出て来た。

「オイ倉蔵、誰だな今怒鳴られているのは？」村長は私語いた。

倉蔵は手を以てこれを止めて、村長の耳の傍に口をつけて、

「お嬢様が叱咤られているのだ」

「エッお梅嬢が」と村長は眼を開瞳つた。その筈で、梅子は殆ど富岡老人に從來一言たりとも叱咤れたことはない。梅子に

対してはさすがの老先生も全然子供のようで、その父子の間の如何にも平穩にして情愛こまかなるを見る時は富岡先生実に別人の

ようだと誰しも思っていた位。

「マアどうして？」村長は驚ろいて訊ねた。

「どうしてか知らんが今度東京から帰って来てからというものは、毎日酒ばかり呑んでいて、今まで御嬢様にはあんなに優しくかった老先生がこの二三日はちよつとしたことにも大きな声をして怒鳴るようにならしやつただ、私も手の着けようがないので困つていたとここで御座りますよ」さも情なそうに言つて、

「あの様子では最早先が永くは有りますめえ、不吉なことを言うようじゃが……」と倉蔵は眼を瞬いた。この時老先生の声で

「倉蔵！ 倉蔵！」と呼ぶ声が座敷の縁先でした。倉蔵は言葉を早めて、益々小さな声で

「然し晩になると大概校長さんが来ますからその時だけは幾干かいくら気嫌きげんが宜ええだが校長さんも感心に如何いくらなると言われても逆からわなないで温おとなしゆ和わうしているもんだから何時いつか老先生も少しは機嫌が可よくなるだ……」

「倉蔵！ 倉蔵は居らんか！」と又も老先生の太い声が響いた。

倉蔵は目礼したまま大急ぎで庭の方へ廻まわった。村長は腕を組ひっかえんで暫時しばらく考えていたが歎息ためいきをして、自分の家の方へ引返ひっかえした。

## 四

村長は高山の依頼を言い出す機会おくりの無いのに引きかえて校長細  
 川繁は殆どほとん毎夜の如く富岡先生を訪うて十時過ぎ頃まで談話はなしてい  
 る、談話はなしをすると言うよりか寧ろその愚痴むしやら悪口あつこうやら気焰きえんや  
 ら自慢じまん嘯ばなしやらの的めになつてゐる。先生はこの頃になつて酒を被こむ  
 ること益ます々甚まだしく倉蔵の言つた通りその言語が益々荒ら荒ら  
 しくその機嫌きげんが愈々いよいよ難むずかしくなつて来た。殊ことに変わったのは梅  
 子に対する挙動ふるまいで、時によると「馬鹿者！ 死んで了しまえ、貴様きさま  
あの在るお蔭で乃公おれは死ぬことも出来んわ！」とまで怒鳴ることが  
 ある。然し梅子は能くこれに堪えて愈々すなお従順すなおに介抱かいぼうしていた。其そ  
 処こで倉蔵が

「お嬢様、マア貴嬢あんだのような人は御座ごわりませんぞ、神様のような

人とは貴嬢のことで御座りまずぞ、感心だなア……」と老の眼に涙をぼろぼろこぼすことがある。

こんな風で何時しか秋の半となつた。細川繁は風邪を引いていたので四五日先生を訪うことが出来なかつたが熱も去つたので或夜七時頃から出かけて行た。

家内が珍らしくも寂然としていたので細川は少し不審に思いつつ坐敷に通ると、先生の居間の次ぎの間に梅子が一人裁縫をしていた。細川が入つて来ても頭を上げないので、愈々訝かしく能く見ると蒼ざめた頬に涙が流れているのが洋燈の光にありありと解る。校長は喫驚りして

「お梅さんどうかしたのですか」と驚惶しく訊ねた。梅子は猶

も頭かしらを垂れたまま運ばす針を凝視みつめて黙もくっている。この時次の室まで

「誰だ？」と老先生が怒鳴いかった。

わたくし

「私わたしで御座ごいます。細川で御座ごいます」

こつち

「此方こつちへ入らんで何をなにしているのか、用もちがあるからちよつと来きい  
！」

「唯ただ今いま」と校長けいが起たとうとした時とき、梅子うめこは急に細川ほそがわの顔かほを見上みあ

げた、そして涙なみだがはらはらとその膝ひざにこぼれた。ハツと思おもつて細

ためろ

川がわは躊躇ためろうたが、一ひと言ことも発はし得えない、止とどまることも出来こないで

そのまま先生せんせいの居間いまに入った。何なにとも知しれない一種いっしゆの戦せん慄りつが身

うちに漲みなぎつて、坐まつた時には彼の顔かほは真ま蒼さおになつていた。富

岡老人おかろうじんは床とこに就ついていてその枕まくら許らもとに薬くすり罎びんが置おいてある。

「オヤ何所かお悪う御座いますか」と細川は搾り出すような声で漸と言つた。富岡老人一言も発しない、一間は寂としている、細川は呼吸も塞るべく感じた。暫くすると、

「細川！ 貴公は乃公の所へ元来何をしに来るのだ、エ？」

寝たまま富岡先生は人を圧しつけるような調声、人を嘲けるような声音で言つた。細川は一語も発し得ない。

「エ、元来何をしに来るのだ？ 乃公の見舞に来るのか。娘の御機嫌を取りに来るのか、エ？ 返事をせえ！」

校長は眼を閉り齒を喰しばつたまま頭を垂れ両の拳を膝に乗せている。

「貴公は娘を狙つておるナ！ 乃公の娘を自分の物にしたいと狙

つておるナ！ ふん」

細川の拳は震えている。

「貴公よく考えてみる！ 貴公は高たかが田舎いなかの小学校の校長じゃやないか。同じ乃公の塾に居た者でも高山や長谷川は学士だ、それにさえ乃公は娘をやら与んのだぞ。身の程を知れ！ 馬鹿者！」

校長の顔は見る見るくれない紅をさして来た。その握りしめた拳の上に熱涙がはらはらと落ちた。侯爵伯爵ののしを罵る口から能くもよそんな言葉が出る、矢張人物よりも人爵の方が先生には難ありがた有いのだろう、見下げ果てた方だと口を衝ついて出ようとする一語を彼はじつとこら怯えている。この先生の言としては怪むに足たらない、もし理窟りくつを言つて対抗する積りなら初めからこの家でいりに出入をしないのである。

と彼は思い返した。

「エ、それともどうしても娘が欲しいと言うのか、コラ！」

校長は一語を発しない。

「判はつきり然と言え！ どうしても欲しいと言うのか、男らしく言え、

コラ！」

細川はきつと頭かしらをあげた。

「左様で御座います！ 梅子さんを私の同伴者つれやいに貰もらいたいと常に願ねがっております！」きつぱりと言い放はなつて老先生の眼がんせい睛せいを正視せいしした。

「もし乃公が与やらぬと言いつたらどうする？」

「致いたし方が御座まいせん！」

「帰れ！ 招喚よびにやるまでは来るな、帰れ！」と老人は言放つて寝返ねがえりして反対むこうを向いて了つた。

細川は直ちに起つて室へやを出ると、突伏して泣いていた梅子は急に起つて玄関まで送つて来て、

「貴下あなた何卒父の言葉を気になさらないで……御存知の通りな気性で御座いますから！」とおろおろ声で言つた。

「イイエ決して気には留めません、何卒どうか先生を御大切ごたいせつに、貴嬢あなたも御大事ごだいじ……」終まで言う能あたわず、急いで門を出て了つた。

その夜細川が自宅うちに帰つたのは十二時過ぎであつた。何処どこを徘徊ろつしていたのか、真蒼まっさおな顔色をしてさも困憊がっかりしている様子を寝ないで待つていた母親は不審そうに見ていたが、

「お前又た風邪を引きかえしたのじゃアないかの、未だ十分でないのに余り遅くまで夜あるきをするのは可くないよ」

「何に格別の事は御座いませぬ」と細川は何気なく言つてそのまま自分の居間へ入つた。母親はその後姿を見送つてそつと歎息ためいきをした。

## 五

その翌日より校長細川は出勤して平常ふだんの如く職務を執つていたが彼の胸中には生れ落ちて以来未だ経験したことのない、苦惱が燃えているのである。

もし富岡先生に罵ののしられたばかりならば彼は何とかして思切るほうに悶もがいたであろう、その煩悶はんもんも苦痛には相違ないが、これ戦たたかである、彼の意力は克よくこの悩に堪たえたであろう。

然しかし今の彼の苦悩は自ら解みく事の出来ない惑まどいである、「何故梅子なげはあの晩泣いていたらう。自分が先生に呼ばれてその居間に入る時、梅子は何故あんな相か貌おつきをして涙を流して自分を見たらう。自分が先生に向むかつて自分の希望のぞみを明言した時に梅子は隣室で聞いていたに違いない、もし自分の希望のぞみを全く否いなむ心なら自分が帰る時あんなに自分を慰める筈はずはない……」

「梅子は自分を愛している、少くとも自分が梅子を恋こていることを不快には思っていない」との一念が執しゅう念ねくも細川の心に盤居わだか

まっついていて彼はどうしてもこれを否むことが出来ない、然し梅子が平常何人ふだなんびとに向ても平等に優しく何人に向ても特種の情態こころもちを示したことのないだけ、細川は十分この一念を信ずることが出来ぬ。梅子が泣いて見あげた眼の訴うるが如く謝わびるが如かりしを想おももいおこ

起おこす毎に細川はうつとりと夢見心地になり狂わしきまでに恋しきの情燃こころえたつのである。恋、惑、そして恥辱はじ、夢にも現うつにもこの苦惱は彼より離れない。

或時は断然倉蔵に頼んで窃ひそかに文ふみを送り、我わが情こころのままを梅子に打明けんかとも思い、夜の二時頃まで眠らないで筆を走らしたことがある、然し彼は思返してその手紙を破つて了しまつた。こういう風で十日ばかり経たつた。或日細川は学校を終えて四時頃、丘

の麓ふもとを例の如く物思に沈みつつ帰つて来ると、倉蔵に出遇であつた。

倉蔵は手に薬くすり罈びんを持っていた。

「先生！ どうしてこの頃は全然まるきりお見えになりませんか？」倉蔵はない様子を知りながら素知らぬ風で問うた。

「老先生の御病気はどうかね？」と校長も又た倉蔵の間に答えな  
いで富岡老人の様子を訊たずねた。

「この頃はめつきりお弱りになつて始終床にばかり就ていらつしやるが、別に此処ここというて悪るい風にも見えねえだ。然し最早もう長くは有りますめえよ！」と倉蔵は歎ためい息きをした。

「ふうん、そうかな、一度見舞に行きたいのだけれど……」と校長の声も様子も沈んで了つた。

「お出いでなされませ、関かまうもんかね、疝かん癩しやくまぎれに何言うたて

……」

「それもそうだが……お梅さんの様子はどうだね？」と思切つて問うた。

「何だかこの頃は始終鬱屈ふさいでばかり御座るが、見ていても可哀そうでなんねえ、ほんとに嬢さんは可哀そうだ……」と涙にもろい倉蔵は傍わきを向いて田甫たんぼの方を眺め最早眼をしばだたいている。

「困ったものだナ、先生は相変らず喧やかましく言うかね？」

「ナニこの頃は老先生も何だか床の中で半分眠つてばかり居て余り口きを用かねえだ」

「妙だねえ」と細川は首をかしげた。

「これまで煩わづらったことが有あつても今度ののように元氣のないことは無ねえが、矢張やっばり長くない証しるしであるらしい」

「そうかも知れん！」と細川は眉まゆを顰ひそめた。

「それに何だか我が折れて愚かえに還かえつたような風も見えるだ。それを見ると私も氣の毒でならん、喧やかまし人は矢張やっばり喧やかしゆうしていてくれる方が可ええと思いなされ」

「今夜見舞に行つてみようかしらん」

「是非来なさるが可え、関せきうもんか！」

「うん……」と細川は暫しばら時ちく考かんえていたが、「お梅さんに宜しく言つておくれ」

「かしこまりました、是非今夜来なさるが可ええ」

細川は軽く點頭うなずき、二人は分れた。いろいろと考え、種々いろいろに悶もがいてみたが校長は遂にその夜富岡を訪問とつうことが出来なかつた。それから三日目の夕暮、倉蔵が真面目まじめな顔をして校長の宅うちへ来て、梅子からの手紙を細川の手に渡した、細川が喫驚びっくりして目を丸まるくして倉蔵の顔を見ているうちに彼は挨拶あいさつも為しないで歸つて了しまつた。

梅子からの手紙！ 細川繁の手は慄ふるえた。無理もない、曾かつて例のないこと、又有り得うべからざること、細川に限らず、梅子を知れる青年わかものの何人も想像することの出来ないことである！

封を切て読み下すと、頗すこぶる短い文ふみで、ただ父に代つてこの手紙を書く。今夜直ぐ来て貰もらいたい是非とのことである、何か父から

急にお話したいことがあるそうだとの意味。

細川は直ぐ飛んで往った。「呼びにやるまで来るな！」との老先生の先夜の言葉を今更のように怪しゆう思つて、彼は途々この一言を胸に幾度か繰返した、そして一念端なくもその夜の先生の怒罵に触れると急に足が縮むよう思つた。

然し「呼びに来た」のである。不思議の力ありて彼を前より招き後より推し忽ち彼を走らしめつ、彼は躊躇うことなく門を入つた。

居間に通つて見ると、村長が来ている。先生は床に起直つて布団に倚掛つている。梅子も座に着いている、一見一座の光景が平常と違つている。真面目で、沈んで、のみならず何処かに悲哀

の色が動いている。

校長は慇懃いんぎんに一座に礼をして、さてあらためて富岡老人に向い、

「御病氣は如何いかがで御座いますか」

「どうも今度の病氣は爽快はつきりせん」という声さえ衰えて沈んでい

る。  
「御大事ごだいじになされませんと……」

「イヤ私わしも最早もう今度はお暇いとま乞こいじやろう」

「そんなことは！」と細川は慰さめる積りで微笑えみを含んだ。しかし老人は真面目で

「私わしも自分の死期の解らぬまでには老耄もうろうくせん、とても長くはあ

るまいと思う、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>で実は少し折入<sup>おまえ</sup>つて貴公と相談したいことがあるのじや」

かくてその夜は十時頃まで富岡老人の居間は折々談<sup>はなしごえ</sup>声<sup>こゑ</sup>が聞え折々寂<sup>しん</sup>と静まり。又折々老人の咳<sup>せきばらい</sup> 払<sup>らい</sup>が聞えた。

その翌日村長は長文の手紙を東京なる高山法学士の許<sup>もと</sup>に送つた、その文の意味は次ぎの如くである、——

御<sup>おん</sup>申<sup>もうし</sup>越<sup>こ</sup>し以来一度も書面を出さなかつたのは、富岡老人に一條を話すべき機<sup>おり</sup>会<sup>あひ</sup>が無かつたからである。

先日の御手紙には富岡先生と富岡氏<sup>し</sup>との二個<sup>ふたり</sup>の人がこの老人の心中に戦かつておるとのお言葉が有つた、実にその通りで拙者も左様思つていた、然るにちようど御手紙を頂いた時分以来は、所<sup>い</sup>

謂<sup>わ</sup>る富岡先生の暴力益<sup>ますます</sup>々つ<sup>つ</sup>のり、二六時中富岡氏の顔<sup>かお</sup>出<sup>だし</sup>する時は全く無かつたと言つて宜<sup>よろ</sup>しい位、恐らく夢の中<sup>うち</sup>にも富岡先生は荒<sup>あば</sup>れ廻<sup>まわ</sup>つていただらうと思<sup>おも</sup>われる。

これには理<sup>わけ</sup>由<sup>ゆ</sup>があるので、この秋の初に富岡老人の突然上京せられたるのは全く梅子嬢<sup>さん</sup>を貴所<sup>あなた</sup>に貰<sup>もら</sup>わす目算であつたらしい、拙者はそう鑑定している、ところが富岡先生には「東京」が何より禁物なので、東京にゆけば是非、江藤侯井下伯その他故郷<sup>くに</sup>の先輩の堂々たる有様を見聞せぬわけにはいかぬ、富岡先生に取つてはこれ則<sup>すなわ</sup>ち不平、頑固<sup>がんこ</sup>、偏屈<sup>へんくつ</sup>の源<sup>げん</sup>因<sup>いん</sup>であるから、忽<sup>たちま</sup>ち青筋を立てて了つて、的<sup>あて</sup>にしていた貴所<sup>あなた</sup>の挙動<sup>ふるまい</sup>すらも疝<sup>かん</sup>癩<sup>しやく</sup>の種となり、遂<sup>つい</sup>に自分で立てた目的を自分で打<sup>たた</sup>壊<sup>こわ</sup>して帰国<sup>かえ</sup>つて了われたも

のと拙者は信ずる、然るに帰国つて考えてみると梅子嬢さんの爲めに老人の描いていた希望は殆んど空くうになつて了つた。先生何が何やら解らなくなつて了つた。其所そこで疝かんは益々起る、自暴やけにはなる、酒量は急に増す、氣は益々狂う、真まことに言うも氣の毒な浅ましい有様となられたのである、と拙者は信ずる。

現に拙者が貴所あなたの希望に就き先生を訪うた日などは、先生の梅子嬢さんを罵る大たい声せいが門の外まで聞えた位で、拙者は機会おりわる悪しと見直ただちに引返えしたが、倉蔵の話に依ればその頃先生はあの秘蔵子なるあの温順なる梅子嬢さんをすら頭ごなしに叱しかり飛ばとばしていたこのことである、以て先生の様子を想像したまわば貴所も意外の感あることと思う。

拙者ばかりでなくこういう風であるから無論富岡を訪ねる者は滅多になかった、ただ一人、御存知の細川繁氏のみは殆ど毎晩のように訪ねて怒鳴られながらも慰めていたらしい。

然るに昨夕さくせきのこと富岡老人近頃病床とこにある由よしを聞いたから見舞に出かけた、もし機会おりが可かつたら貴所の一条を持出す積りで。老人はなるほど床に就いていたが、意外なのは暫時しばらく会ぬ中あわに全す然っかり元気が衰えたことである、元気が衰えたと云うよりか殆ど我が折れて了つて貴所の所謂いわゆる富岡氏、極く世間並の物の能く通曉わかった老人に為つて了つたことである、更に意外なのは拙者の訪問をひどく喜こんで実は招よびにやろうかと思つていたところだのとのである。それから段々話しているうちに老人は死後のことに就

き色々いと拙者に依いたく托せられた、その様子が死期の遠からぬを知つておられるようで拙者も思わず涙を呑のんだ位であつた、其そこ処で貴所の一条を持出すに又とない機おり会と思ひ既に口を切ろうとすると、意外も意外、老人の方から梅子嬢さんのことを言い出した。それはこゝうで、娘は細川繁に配する積りである、細川からも望まれている、私わしも初は進まなかつたが考えてみると娘の為め細川の為め至極良縁だと思ふ、何卒どうか貴所あなたその媒酌者なこうどになつてくれまいかとの言葉。胸に例の一条が在る拙者は言句ごんくに塞つまつて了つた、然し直ぐ思ひ返してこの依頼を快く承諾した。

と云うのは、貴所に対して済ぬようだが、細川が先に申込み老人が既に承知した上は、最早もはや貴所の希望は破れたのである、拙者

とても致し方がない。更に深く考えてみると、この縁は貴所の申込が好し先であつてもそれは成就せず矢張、細川繁の成功に終わるようになっていたのである、と拙者は信ずるその理由は一に貴所の推測に任かす、富岡先生を十分に知つてゐる貴所には直ぐ解るであらう。

かつ拙者は貴所の希望の成就を欲する如く細川の熱望の達することを願う、これに就き少も偏頗へんぱな情こころを持っていない。貴所といえども既に細川の希望が達したと決定きまれば細川の為に喜ばれるであらう。又梅子嬢さんの為に、喜ばれるであらう。

そして拙者の見たところでは梅子嬢さんもまた細川に嫁かすることを喜こんでゐるようである。

これが良縁でなくてどうしよう。

拙者が媒酌者なこうどを承諾するや直ぐ細川を呼びにやった、細川は直ぐ来た、其処そこで梅子嬢さんも一座し四人同席の上、老先生からあらためて細川に向い梅子嬢さんを許すことを語られ又梅子嬢さんの口から、父の処置に就いては少しも異議なく喜んで細川氏に嫁すべきを誓い、婚礼の日は老先生の言うがままきたるに十月二十日と定めた。鬪くじは遂に残者のこりものに落ちた。

貴所からも無論老先生及細川に向て祝詞を送らるることと信ずる。

婚礼も目出度く済んだ。田舎は秋晴拭うが如く、校長細川繁の庭ではあねさまかぶり姉様冠の花嫁中腰になって張物をしている。

さて富岡先生は十一月の末終ついにこの世を辞して何国なにくには名物男一人を失なつた。東京の大新聞二三種に黒粹くろわく二十行ばかりの大きな広告が出て門人高山文輔、親戚しんせき細川繁、友人野上子爵等の名がずらり並んだ。

同国の者はこの広告を見て「先生到頭死んだか」と直ぐ点頭うなずいたが新聞を見る多数は、何人なればかくも大きな広告を出すのかと怪むものもあり、全く気のつかぬ者もあり。

然しこの広告が富岡先生のこの世に放つた最後のいっかつ一喝で不平

満腹の先生がせめてもの遣こころやり悶ちじんを知人に由よつて洩もらされたのである。心ある同国人の二三はこれを見て泣いた。



# 青空文庫情報

底本：「牛肉と馬鈴薯」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45年）年5月30日初版発行

1983（昭和58年）年7月30日2刷

入力：Nana Ohbe

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年6月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 富岡先生

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>